

職能科通信 45号

2020年 3月発行

職能科通信

検索

〒243-0121
神奈川県厚木市七沢 516
神奈川県厚木市七沢 516
神奈川リハビリテーション病院
職能科
TEL&FAX 046-249-2571

【高次脳機能障害セミナー 就労支援編】

令和2年2月8日(土)、神奈川県総合リハビリテーション病院地域リハビリテーション支援センター主催『高次脳機能障害セミナー就労支援編』が、おだわら市民交流センターUMECOにて開催されました。このセミナーは、高次脳就労支援機関の方への就労支援の方法と理解、連携を目的としています。参加者は就労支援員に限らず、作業療法士、言語聴覚療法士、ケアマネージャー、サービス管理責任者等、38名の多くの職種の方に参加をいただきました。県外からの参加者も多く、高次脳機能障害者の就労支援についての関心の高さがうかがわれました。

午前のプログラムは、就労移行支援事業所クロスジョブ阿倍野事業所所長の辻寛之氏より、『高次脳機能障害の就労支援』と題して、クロスジョブでの取り組みについて、事例紹介も含めて講義をしていただきました。その後、職能科小林から、職能科の紹介と復職に向けた支援、グループワークの効果について報告をいたしました。いずれも、高次脳機能障害の就労支援は、多職種・多機関の連携が重要であることを再確認することとなりました。



(クロスジョブ阿倍野事業所所長 辻寛之氏)

午後のプログラムは、午前の講義内容をポイントとして、実際に当科と地域の支援機関が連携し復職支援した事例について、グループワークを行いました。簡単な事例紹介シートから復職支援計画を作成する上で必要となる情報を各自出し合い、グループ内で検討、発表を行いました。各グループには、ファシリテーターとして、外部講師の方も参加していただきました。各班の発表後、実際に当科と連携した障害者支援センターぽけっとの恩蔵幸一氏より、実際の支援経過と現状の報告を受け、グループワークのまとめとしました。

後半は、神奈川障害者職業センターの木下哲次氏より、各支援機関の役割、就労支援機関と連携した支援、障害者職業センターのジョブコーチ支援について、実際の事例紹介も含めて、お話をいただきました。また、障害者就労・生活支援センターぽけっとの渡辺直人氏より、障害者就労・生活支援センターの地域に根差した就労と生活、双方の支援、多種多様な地域資源を活用した雇用と福祉のネットワークの必要性について、お話をいただきました。

また、グループワークでは、各専門職の立場から意見を出し合い、支援計画を練り上げることとなりました。多職種・多機関の連携の重要性、地域の就労支援機関の役割、活用方法の理解に繋がったと思われます。来年度は、横須賀三浦地区にて開催予定です。(山崎 修一)

《講師一覧》 NPO 法人 クロスジョブ阿倍野所長 辻寛之氏
社会福祉法人よるべ会 障害者就業・生活支援センター課長 渡辺直人氏
神奈川障害者職業センター 職業カウンセラー 大下哲次氏
神奈川リハビリテーション病院 総合相談室高次脳機能障害相談支援コーディネーター 中澤若菜、永井喜子
職能科 松元健、今野政美、小林國明、山崎修一、露木拓将

【高次脳機能障害へのグループ訓練 作業療法士としての関わり】

高次脳機能障害とは病気や怪我などにより脳に損傷を受け、認知・知覚・判断などに問題が起こった状態となります。目に見えない障害とも言われ、社会活動を営む上で様々な影響を及ぼし、本人も気づかない状態で過ごしていることもあります。

高次脳機能障害の症状の一つに固執というものがあります。一度思い込んだら行動せずにはいられない・あることが頭から離れられないなどの状態が続くと社会生活に支障をきたしてしまいます。そのような状態を調整するためには、気持ちをコントロールする力（内部環境を整えること）と外からの刺激・ストレスを軽減すること（環境の構造化）が重要と考えられています。

今回は内部環境を整えるアプローチとして当職能科で行なっている高次脳機能障害へのグループ訓練で大切にしていることや作業療法士としての関わりをご紹介します。と思います。

グループ訓練は、時期・疾患・目的によりメンバーを構成しセミクローズドで行なっています。期間はそれぞれの復職期間により異なりますが、数ヶ月の長期的な関わりの中で集団の凝集性が高まり、一人一人の表情が生き生きとし、驚くほどのチームプレイやパフォーマンスを発揮することがみられています。

グループ訓練の効果として、他者との交流を持つことでコミュニケーション技能の向上、同じ課題を複数人で行うため、他者の誤りをみながら自己修正が促されること、人前で発表することで緊張場面を作りストレス状況での課題処理を経験したり、自分よりも以前に受傷した人がどういう形で社会参加していくかをみることで現実的な目標の受け入れが促されるなどがあります。

このようにグループ訓練という場の中で他者との交流を保ち続け社会復帰の準備期間としての役割がとても大きいと感じています。

作業療法士としての関わりでは、グループ訓練を行なった後、参加者全員が楽しかったと感じてもらえることを意識して行なっています。そのためには課題の設定、段階づけや交流を促す支援などを行いますが、もう一つ大切にしていることは冗長性を養うことです。

冗長性とは簡単にいうと「無駄」のことですが、ここでは「心の余裕」として考えています。中途障害を持った方が、一生懸命に元に戻ろうとしているとき心の余裕を持つことは大変難しいことです。しかし、心の余裕を持つことができずに社会復帰をされると固執のような症状が現れ社会でトラブルが起こりやすくなると考えられます。

社会復帰の準備期間ではグループ訓練で他者交流を保ち続け、仲間と楽しい活動を過ごし、一つでも幸せを感じることができれば良いと考えています。人と人が上手につながる支援として尽力していきたいと考えています。

（OT 露木拓将）

